

小学校授業の概要

授業者：平川 譲 授業学級：4部4年

1. 生涯スポーツに向けて、小学校期に育みたい力

テーマにある育みたい力を一言でいえば「動ける体」である。基礎技能・感覚を育み、運動に関して成功体験を積み上げることで、運動に対して肯定的な感情をもってもらいたい。できることを（今ある力で）楽しめばいい、活動する内容や方法を工夫することで十分に楽しめるという考え方があることは承知している。しかし、ゴールデンエイジを預かる小学校期に基礎感覚・技能を高めることを確実に進めなければ、教育関係者だけでなく、保護者や納税者をはじめとする社会全体も、小学校体育の存在価値を認めてはくれないだろう。

今回着目したボール運動では、6年間でボールの投捕技能を確実に身につけさせたい。これを基盤に、「相手のいな所にボールを運ぶ」ことを3つの型（ゴール型、ネット型、ベースボール型）に共通する学習内容として、学習を進める。

ボールを運ぶ方法は、以下のように各型で異なる。

◇ゴール型は、パスでボールを運ぶ

◇ネット型は、ボールを弾いて運ぶ

◇ベースボール型は、ボールを打ったり蹴ったりして運ぶ

これらの、ボールを弾くや、ボールを打つなどの種目固有の技能は、ボール運動単元の前に、体づくり運動領域の教材である程度高めておき、単元ははじめから多くの子がゲームを楽しめるようにする。

その上で、簡単なボール操作で楽しめるような教材化で、技能水準低位の子どもを含めて、全員が実質的にゲームに参加できるようにする工夫をした。今回の「両手で下からバレーボールテニス」では、“両手で下から”ボールを弾くルールにしたことでボール操作が容易になり返球の速度を抑えることができる。これにより技能が低い子どもボールに対応しやすくなる。

このような教材で全員の技能を高めて、生涯スポーツに向かう資質・能力を育みたい。

2. 活動計画

両手で下からバレーボールテニス 20分×5回（本時5回目）

（単元前のボールを弾く技能を高めるゲーム「つづけるくん」（体づくり運動領域）は
20分×3回）

3. 公開授業概要

本教材の前時は2ヶ月近く前になるため、授業開始前につづけるくんに取り組ませ、ボール操作やコート、用具（ネット代わりのコーン・バー）の感覚を思い出させた。

ゲームに取り組む前に、「得点するためにはどんな所をねらった？」と発問して、運動のポイントを想起させた。子どもたちからは「コートの端」「コートの奥」「相手が奥にいれば手前」「相手をねらう（ワンバウンドしたボールを弾くというルールなので、これも有効）」などの意見が出された。ゲーム中、授業者は前記の意見のように弾こうとしているかを見取るように努力し、成否に関わらず、ねらっていることを称賛し続けた。

20分間で、対戦チームをを変えて2回戦実施した。

（平川 譲）

中学校授業の概要

ネット型球技「バレーボール単元」

授業者：秋山 和輝 学習者：中学3年生 39名（男子19名・女子20名）

1. 公開授業の概要 「12年間で育みたいカー生涯スポーツに向けて」の考え方

12年間の教育活動の中で生涯スポーツにつなげていくためには発達段階に応じた運動の楽しみ方と習得すべき内容を明確にする必要がある。そのためには指導内容を明確にするだけでなく、習得するための教材化（教具の工夫、コートや人数の修正など）や段階的指導は必須であると考えた。

そこで本実践では小中高共通の素材（種目）であるネット型球技を取扱い、学習者の発達段階や実態に応じて教材化する。中学校ではネット型球技のバレーボールにおける攻防を楽しむとともに返球する楽しさを味わえるようにメインゲームのコートサイズ、ネットの高さ、ルールに工夫を入れた。

中学3年生の学習指導要領解説に記載されている「仲間と連携した拾う、つなぐ、打つなどの一連の流れで攻撃を組み立てる」ためにキャッチバレーを取り入れた。単元前半はセカンドキャッチ（2人目がキャッチ）を用いた簡易ゲーム、単元後半はセッターのトスからアタックまでの一連の流れをスムーズに行うためにファーストキャッチ（1人目がキャッチ）を用いた簡易ゲームを設定した。以下の点を工夫した。

- ① ネットの高さは200cmで行い、バドミントンコートを使用する。
- ② 1チーム4人（男女混合）チームであり、フォーメーションを工夫する。
- ③ 返球するために教師の発問と返球場所を理解する。
（具体的な発問例）「相手コートに返球するためにはどこで（どの場所で）返球すればよいですか？」
- ④ ファーストキャッチはミカサ社製VS160W-Y-BL 4号球（160g）を使用し、セカンドキャッチはmolten社ソフトサーブ軽量4号球（210g）を使用した。重さの違いによりトスを上げやすい工夫をした。
- ⑤ サービスエースはなく、アンダーハンドもしくはフローターサーブによるゲームの開始、再開を意識させた。エンドラインではなく、自陣のどこからでもサーブを行うことができ、2回連続で失敗した場合はフリーボール（山なりの下からの投げ入れ）でゲームを再開することとした。

2. 公開授業を振り返って

1) 本時の目標

- ・ボールを相手コートに空いた場所やねらった場所に打ち返すことができる（知識及び技能）。
- ・チームの作戦確認や練習方法の選択で自分の考えを伝えようとしている（思考力、判断力、表現力）。
- ・仲間に助言したりして、互いに助け合い教え合おうとしている（学びに向かう力、人間性等）。

2) 授業展開（実際の様子）

授業展開としては本時のねらいを確認した後に、各グループでウォーミングアップに入った。ゲームで技能を十分に発揮するためにボール操作技能（アンダーハンドパス、オーバーハンドパス）の習得の時間を単元として確保した。その後、グループの課題を確認し、練習の内容確認、練習の選択を行った。これまでの学習を踏まえ、発問を通して効果的な攻撃の仕方や発揮する技術を確認した。

グループ練習で行ったことが試合で発揮されるのかを確認できるように毎回の授業では試合の時間を十分に確保した。課題の確認－練習－試合－振り返りというオーソドックスな一連の学習の中で生徒に意識させたいことは発問を通して確認し、振り返りを行って課題改善に向けての学習過程を継続して行った。

3. 研究協議

協議会ではご参観いただいた先生方と授業づくりの視点や工夫についてご意見を多数いただいた。特に本単元でもこだわった教材配列の順序性に関しては指導内容と単元目標に合わせて柔軟に対応していくものであるという共通認識をもつことができた。12年間の学習活動の中で大事にしている部分は共通しながらも発達段階に応じて校種ごとに育てたい資質や能力は異なり、教員間で連携しながら継続的な教育が重要であることを再確認した。

高校授業の概要

授業者：今西 智津子 授業学級：高校2年生女子 39名

単元名：球技 ネット型 バレーボール

1. 生涯スポーツに向けて 高校期に育みたい力

高等学校の体育は、12年間にわたる学校体育の出口として、生徒が卒業後も運動やスポーツと多様な形で関わり続けるための力を育てる重要な段階である。高校期は、技能を高めることのみならず、各種目を深く学ぶことを通してその面白さや難しさ、工夫の余地を知り、自分なりの楽しみ方や関わり方を考えるための知識や経験を蓄積する時期であると捉えている。本単元は、3年次の選択授業を前にした時期だからこそ、バレーボールの種目特性を深く学び活かす中で、各々がスポーツへの関わり方や楽しみ方について考える単元と位置付けた。

2. 単元計画のねらいと内容

バレーボールは、連携によって攻防が成立し役割分担やコミュニケーションの重要性を学習しやすい。一方で、ミスが即失点につながり誰のミスかが分かりやすいという特性から苦手意識をもつ生徒も多い種目である。苦手な生徒でも多様な攻撃に参加しやすくするために、「キャッチあり」「何度でも触れて良い」等の根本的なルール緩和を行うことは有効な手段である。しかし、それにより競技の重要な特性を失ってしまう側面があり、かつ高校段階として公式ルールに極力近づけていくといった目標から離れてしまう。そこで本単元ではルール緩和に代わり、ポジションやローテーションといった「役割分担」を活用することで、主体的な行動やコミュニケーション、ポジティブなマインドセットの変化を促すし、生涯にわたりスポーツに前向きに関わるための土台を育てることをねらいとした。

単元は、全13時間で構成した。前半は、レシーブ・トス・スパイクといった基礎技能の向上を重視し、毎授業ミニゲームを実施する中で、その技術をゲームに生かす方法について学んだ。中盤からはチームを固定し、ポジションやローテーションといった基礎戦術、本単元の学びの肝となる「バレーボール特有の役割分担」を中心に学習を進めた。後半は、試合を通してチームの課題解決に取り組むとともに、大会運営や審判活動にも生徒が関わることで、多様なスポーツとの関わり方を学習した。また、単元を通して基礎技能の定着のため、レシーブを中心とした「授業外課題」も設定し、技能向上とともに日常的にスポーツに取り組ませる習慣づくりも図った。

3. 公開授業と協議会について

公開授業は単元7時間目に位置付け、リベロを導入した守備戦術の学習を行った。前半の課題別練習では、リーダーの生徒が各ポジションの練習を牽引し、生徒は自分の課題に合った活動を選択して取り組んだ。事前に教員がポジションごとの課題設定や活動内容についてリーダー生徒に指導しておいたことが、活動の円滑な展開につながった。後半はリベロの導入に向けてホワイトボードで知識を整理した後、チーム別練習や試合を通して有効な活用方法を学習した。結果としてリベロを十分に活用しきれなかった班もあったため、自由交代を認める、後衛に常駐させるなど、生徒がよりリベロの有効性や役割分担の面白さを実感できるようなルール設定の工夫が今後の課題であると感じた。協議会では「とてつもないチャレンジ」という感想をいただいた。「全13時間のみ」「女子のみ」と条件面から困難視されがちな内容も、着眼点を変えながら挑戦と修正を繰り返すことで、より新しい種目の学び方や楽しみ方を見いだせるのではないかと実感できたことが、今回の研究会での最大の学びであった。